

史 林

第三十卷 第三號

(通卷第百十八號)昭和二十年九月發行

ギリシアに於ける歴史學の展開

原 隨 園

凡そ民族と呼ばれる程のものは、どの民族でも自己の

過去に對する回想をもつてゐる。神話とか傳説といふ如き傳承がそれである。しかしそれは勿論眞の歴史ではない。いづれも非個人的な性格をもつてゐるからである。

その關係する對象についても、またその作製された緣由についてみても、種族的ではあるが非個人的である。丁度民謡が情緒の種族性を示しながらその來山において個人的ならざると同様である。特別な人間が對象を明確にして民族の行動をとりあげるときに、眞の歴史がはじめてあらはれる。かゝる意味からギリシア人は意識的に

歴史を書いた最も早き民族の一つであり、歴史學もギリシア人の開拓に負ふところ多大である。

勿論批判的な歴史研究は古代には乏しいのであつて、たとひヒストリアが、研究を意味したとしてもそれはなほ主觀的色彩が強かつた。素樸な合理主義は存在してゐたけれども、なほ未だ歴史批判と稱しうべきものではなかつた。

歴史意識の發達するためには、人間に對する關心の深まることと、事實に對する探求の念と、それを發展の形において把握することゝが考へられなければならない。

人間が人間に就いて語ることが極めて古くから存してゐるのは當然だと人は考へるかも知れない。しかるに人間を人間として考へるといふことは案外遅かつたのだといへば、恐らく人は怪しむであらう。

「怒を歌へ女神よ」とか、「此の人に就いて語れムウサイよ」といふ言葉でホメロスは歌ひ出して居る。ギリシア人はかく早く人間に就いて關心をもつた。しかしホメロスにおいては、人間と神とはなほ結んで離れなかつたのであり、神々は人間の生活に干渉した。人間が人間としての生活を營むと考へたのは、ギリシアの文物が相當に進んだ後のことにかゝる。「人間が萬物の尺度だ」と喝破したのは、ソプヒステスの出た頃なのである。

次に發展の形で事實を把握するといふことは、ヘシオドスの系圖や彼の五時代觀について一應見ることが出来る。また事實に對する關心は地誌や現代世界の記述として、ロゴスの作者の態度にみられる。このことは嘗つて説くところがあつた(ギリシア史研究第一)。

かくして人間について、その眞實の姿を探求しその發

展を考へんとしたところにギリシアの歴史學は淵源する。かくして芽生えたギリシアの歴史學が如何なる展開を示したかが今の問題とするところである。

彼等が何を書かんとしたか、何を書いたか、如何に書いたかといふことは、勿論取上げられる筈であるが、就中「歴史」を如何に理解したかといふことが自ら主眼とされる。

二

歴史を表現するに使用された散文は本來飾りのないのが特色である。その要は達意にあり、事象を率直に傳へるにある。だから歴史が散文を以て書かれた點に、事實^{ツベキトキニ}への知識を重視したことを認めうる。哲學と同じく歴史が散文で書かれた所以は、事實の認識を肝要としたからである。ギリシアに散文の起つたのは紀元前六世紀であつた。丁度科學精神の盛となつた時である。即ち散文でかかれる歴史が起つたといふことは、そのことのうちに眞實への科學的探求の精神の動きを看取しうるのである。

かゝる眞實への探求も實は人間の現實生活における效

用に出發した。

サラミスの領有をメガラと争つたソロンは、イリアス(二卷五五八行)を證據として引用した。(Pouanchos, Solon C.) かく古代の傳承は國土の領有權の證據とさへなされたのであつて、かくて神話、傳説も公私實踐の上に必要な知識となつた。また旅行家や航海者が盛に出るやその案内として新らしい地方の知識が要望された。そして旅行記、綺聞の類が作られたのである。このやうに實用的な目的が、他の諸科學と同様に歴史學にも働いてゐた。かくして歴史學は事實の確認のため、新らしき知見を擴むるために功獻するところがあつた。

ギリシア人は眞實への強き愛着をもつた。ギリシアに學術の榮えた基礎は他ならぬ此の眞實を愛する精神のうち宿つてゐた。

歴史における眞實への愛は先づ歴史事實の確認でなければならぬ。

【註】「最も根本的に語られた最も眞實なるものを信ずる」

(Ephoros, fr. 9)

ギリシアに於ける歴史學の展開

それは歴史家自ら體驗するといふことによつて、一番確實に把握されたとした。ヘロドトス以來、目撃するといふことが重視された所以である、ツクエディデスも自ら實戰の經驗があることを歴史家としての強味と感じ、エプホロスも、

「若し筆者がその現實の事件に居合はすことが出来れば、それを知るに最も好いことであらう」(fr. 110)といつてゐる。

【註】「プラトンは王が哲學者となるか、哲學者が王とならねば人間のことはうまくゆかぬと言つてゐるが(262)自分も亦實際家 Pragmatikos andon が歴史を書くか(263)或は實際の經驗が歴史を書くために第一に必要なといふ確信を歴史家がもつまでは、ほんたうに歴史は書かれぬと言ひたい。」(Polibios, XII, 28)ポルユビオスは實際の知識をもたないで「眞の歴史は書けないといふことを、屢々くりかへしてゐる。

眞實を愛し體驗を重んずるところから、歴史家は旅行して親しくその土地、風土、慣習、傳説、珍奇なるものを探ることが必要だとされた。かくして歴史は早くも地理の研究と結びつき、地理學、人類學が伴ひ起つて來

た。ロゴスの作家はその先蹤であつた。ヘロドトスの作品についていへば、

一、土地の記述 二、系 圖

三、驚異すべき諸事 (Thaumasia) 四、慣 習

の四項を主眼として記して居り、埃及、波斯、ルエディアなど外國のことを記載してゐるのである。ヘロドトスの此の立場は、ロゴスの作家と變りはなくしてそれを大成したものであつた。以てロゴス作家の傾向が窺ひえられるとともに、之が後の風俗誌、廣くいつて文化史の源流をなしたのである。歴史學はこのやうにしてギリシアに成長していつた。

ロゴスは然し必ずしも眞實の話だけではなく、綺談的な爽雜物を含んでゐた。そこで眞實を語る者、豫言者、教養ある者、歴史家といふ意味をもつたロギオスと稱せらるゝものが起つて來た。單なる綺談的ロゴスから區別されたのであつて、合理的なるもの、眞實を傳へるものへの要請のあらはれである。ヘロドトスの先輩ヘカタイオスにもかゝる眞實を書かうとする意圖があらはれてゐ

る(西洋史說苑第二輯拙稿参照)。

更にヒストリアと呼稱されて歴史が出現したことは、それが眞實探求の結果たることを示すのであり、自己の見聞、自己の體驗に加ふるに信賴すべき史料として公文書パブリックをも參酌したものであつた。ロゴスがヒストリアとなつたところに批判への要求の濃厚になつたことが看取される。

之は科學の發展の上からいつて、當然だといふべきことではあるが、歴史學を樹立したといふ權利をギリシア人が要求しうる重要な點の一つであり、ヘロドトスもツクユデイデスもこの點に注意を拂つて來たのである。

三

ギリシア人が歴史學の創建者として權利を主張しうる第二の點は、歴史を書く目的を明確に自覺したことである。即ち政治教育の目的を歴史に與へたことである。元來既に説いたやうに、實用的意味を含んだ歴史學であるが、それが特に政治教育のための樞要な學として考へられて來たことである。ポルユビオスは曰く、

「既に起つた業績についての知識よりも、人間にとつて最もふさはしい教訓はなし」(Poly. I, 1, 11)

「歴史からの教訓は政治生活に對して、最も眞實な教養であり訓練である」と (Poly. I, 1, 2)

元來ギリシア人はポリスを人間完成の場所と考へ、政治に參割することは市民としての義務であり、人間當然の仕事と考へてゐた。従つて政治への理解が人間教養の必須科目とならざるをえなかつた。そのために政治的現實への關心強く、その由來を明かに知らんとした。所謂公事の歴史を知らんとした。そのことの最も明かにされたのがツクユデイデスにおいてであつた。

彼は特に政治教育のために歴史を書くとは言つてゐないが、アテナイ興亡の事情については大なるパトスをもち、その間の説明をすること一再にとどまらない。

例へばシケリア遠征について、アテナイでは民衆の氣紛れに政治的處置を委ね(II, 65, 10)此の弱點が多くの過誤を犯さしめた。その最大な過誤がシケリア遠征であるといひ、その失敗は敵の力を誤算したからではなく、

彼等はその行はんとする遠征の利害を考へず、反つて民主政治の權力をえんとして互に陰謀を廻らしたからだと考へる。即ち軍の行動によつて妨げられたのではなく、先づ國內において紛糾を來したが失敗の基だといつてゐる。(II, 65, 11)。

或はアルキビアデスは司令官として無比な技倆をもつてゐたのであるが、彼の私行に對しての不信用が政治を委ねしめられず、かくして國家は急に没落の道を通つたとする(VI, 15, 4)。

實にツクユデイデスが、國民一般に向つて要望することは政治に理解をもつといふ必要であつた。勿論私行において完全なることが政治家として切要だとするのであるが、更に一般人士について、家庭の事に没頭する人となし雖も政治についての知見を缺いてはならない。國家のことに關心をもたない人間は無害なものだといふのではなく、無用のものだといふ。たとひ政治を創造するものは國民の少數でしかないにしても、凡ての國民が政治について健全な判断をもつ(II, 40, 2)。これがアテナイの誇

りとするところであり、彼等が他のギリシア諸族に卓越する所以だとしたものである。

このやうに市民が政治をよく理解せりと稱揚するのは、市民たるものが當然政治のよき理解者たるべきを前提したものである。そして國策の成敗を歴史について、彼が論じたのは、かゝる歴史的な知見をとほして、國策のよき助成者たらしめんと期待したためである。これほど明確に歴史記述の目的を自覺し、それを達成しえたものは、ツクユデイデス以前にはなかつたのである。

更に國家の興亡民族の發展が如何にして起つたかを考へるとき、彼等が如何なる制度の下に大きくなつたか、一つの問題となる (Thoukudides II, 36, 4)。

民族の興隆が一つの戰によるとか、或は資源が豊富なためだとか、或は文化が進んでゐたからだといふことを考へる前に、その政治組織如何といふことが思念されたのである。これほど端的に彼等の政治のあり方を反省せしむるものはない。こゝに歴史の政治史的把握に向つて

の根源がある。政治の歴史を書かんとしたといふよりも、むしろ政治を考へなければ歴史がわからぬとみたといふべきである。民族によつて政治構造がちがひ、政治理想を異にすることが説かれ、ギリシア的な自由平等の謳歌されたことは既にヘロドトスにみゆるところであつた。このやうに人間を政治的人間として把握することはむしろギリシアの特長といつてよい。その間に嶄然頭角を擡んでて明確に政治史を確立したものはツクユデイデスであつた。

ポルユビオスにおいて、ロオマが殆んど全世界を五十二年の間に支配したのは如何にして出来たかといひ、如何なる政治組織の下においてあつたかと尋ねたのも (VI, 1, 3)、皆同じ精神である。

「人は系譜、植民、市の起源、血縁の關係などに興味をもち、政治の研究家は人種、都市、王家の公アラセイス事に心を惹かれる。自分が注目するのは此の最後の點なのである」 (IX, 1, 45) とポルユビオスは明確に言つてゐる。歴史の政治的理解を端的に披瀝したものである。

ヘロドトスにせよ、ツクユデイデス、ボルユビオスなどが、特に現代史に注目したのは、このやうに歴史學を人間教育の學として現代の政治理解に資せんとしたため
に他ならぬ。

四

歴史が實踐のための教訓として、特に政治教育のために、國家興亡の淵由を知らしめんとしたのは、一面においてギリシア人自體の政治的活躍の旺盛なりし姿を思はしめる。そして彼等の政治的活躍の盛時が過ぎると、歴史は單にひろく人間陶冶のための材料とされた。デイオドロスは

「歴史は眞理の豫言者であり、いはゞ哲學の母であり、品性を正しく陶冶するものではないか」(Diodoros, I, 2, 2)

と云つてゐる。また、

「歴史を書く人は全人間に大に功獻する。それは自分の勢力によつて一般の最善を勧めんと意圖をもつから。即ちその物語によつて讀者に最も適切なる經驗を

分ち、何が善いことであるかといふ危険なき道を示す。歴史の知識は、私人、官吏にふさはしいものである。また歴史は名を不朽ならしめるために政治家を勵ます」(Diod., I, I, 1)

とも言つてゐる。

此のやうに歴史が人間實踐の學となつたから、單に政治的な事件だけを書くのではなく、人物の月旦を行ひ、政治についても得失を論ずるに力を注いだ。

人間實踐の規範として古代を理想化して記述することは特に辯士レトレスの間に起つてゐる。イソクラテスの「讚賞論」パネクユリノスとか「エウアゴラス」の如きがそれである。

辯士たちは従來敘事詩人たちが國民教育者であつたのに代らんと志した。従つてツクユデイデス以上に個性描寫に力を注ぎ、或は禮讚エトイマシし、或は批議アプソスした。ともに「言」レグス・エレグイテイコスの一部をなしたのであつて、單なる事實記述

以上の性格を荷つてきた。即ち事實に基くべき歴史が、作者の意圖によつて強調され、強調される結果として時に歪曲を免れなかつた。いはゞ道德的材料を史實に仰い

で之を藝術的に表現するを以て目的とするにいたつた。かくて、歴史は、その實用的な面を強調することによつて、眞實への探究が忽諸に附せらるゝにいたつたのである。

此の辯士の先驅をなすものは事實を記載したと稱する宣傳的なものであつて、クヒオスのイオン、タソスのステシムプロトス、或はクセノブホンと傳稱さるゝ「アテナイ人の國家」などがれそである。

【註】イオンには「クヒオスの占領」、「流行病」があり、ステシムプロトスは「テミストクレス、ツクユデイデス及びペリクレスについて」を書いてアテナイの民主政治を誹謗してゐる。共にイオニア主義、知識主義に反對するものであり、従つてキモンその他のペロポネソスの考を基調とし、ペリクレスやテミストクレスに反對する。キモンの人物評にしてもイオンは單なる社交人としてみるのに對して、ステシムプロトスは親スパルタの人物とみるなど意見は區々としてくる。それらは人々の立場によつて異るとして恕すべきであらうが、政治的批判といふものさへもはなれて、所謂ゴシップ的な月旦とみゆるものがある。

等しく人物の月旦をするにしても、ツクユデイデスは

之を國家の歴史の流れにおいて把握しすべて政治的意義において掴まんとした。そしてその批判は政治教育的でありつゝも、純客觀的に人物をみようとする歴史的態度を失はなかつた。イオン、ステシムプロトスなどにおいては、月旦が先行し、眞實は輕視されて來たのであつて、歴史學が漸く本流を脱逸しはじめたのである。

エプホロスエピドロスはイソクラテスの弟子であるが、讚メヒテイクラテス頌ヒストリアと歴史とを比較對照した(2: 111)。そして史學の本流を守らんとしたのであつた。ディオドロスは流石に歴史家としての立場を知り、

「歴史家はその全卷を通じ、獨自の自由な大膽さを以て語るやうに慣らされてゐる。正しい事をした人にその尊貴な行爲をふさはしく賞めるばかりでなく、凡ての過誤についてもそれに相當する批難を以て罰すべきである」(Diod. XV, 1)

といつてゐる。人間を道徳的角度からみんとしてゐることは辯士と變りはないが、單なる頌讚のための頌讚でなく、單なる誹貶のための誹貶でなく、事實について功罪

を断すべきだとしてゐる。

ところがキケロになると、エンロミウス・カタイン、ヒストリコ頌讚と歴史とを區別

してはゐるが、それでもなほイソクラテスの歴史を正し、シキロとつてゐる。(Cicero, Or. 207; de Or. II, 51 ff; 20 ff)。

歴史は唯年代記の積集に過ぎぬと稱し、事實を明かにせずして唯敘述するのみといつてゐる。これはアリストテレスの流れを汲む思想であるが、かゝる歴史に生彩あらしむるは、歴史家の鋭き判断による成敗の批評に存するのである。單に理想的な人物を掲げ、懲惡的に人物を非難するのではなく、眞實を直視してたじろかす、その中に教訓を汲みとるところに眞の歴史教育が存する筈である。ペリクレスが、

「無知なるが故に勇敢であり、考へることによつて臆病になるのではない。アテナイ人は實行に先だつて考へる力をもつ」

と誇つたのも、またツェデクイデスが飽くまで、

「歴史事實の眞實によつて判断すべし」

といつたのも、歴史から教訓を汲みとる古今の鐵則であ

る。強き知性と冷かなる理性と疲れざる思索とによつて、逞ましき實踐は産れるのであり、歴史は事實を提げて之を培ふべきものである。

五

歴史が實踐に資するための材料として教育的に取扱はれたにも拘らず、人物を頌讚するものと歴史とを區別しなければならぬとされてきた。これは歴史が事實によらねばならぬといふことが強く信ぜられたためではあるが、他方では歴史が單なる事實の羅列であつてはならないといふことが切實に考へられてきたことを意味する。即ち歴史とは何であるかゞ考へられ、人間の歴史が如何なる構造をもつべきかゞ思惟され來つたためである。

ツクエダイデスはペロポネソス戦役の歴史を書いてゐるが、戦争を權力意志の顯現であるとみた。「ラケダイモンはヘラスにおける最も強力な國であつて同盟を指導せんとし、アテナイはベルシア軍の來た時にはその市をすて家を破り、船を造つて海國となつた」(L. 18. 3)のであるが、「此のアテナイの勢力が成長してそれがラケ

ダイモンを脅し戦を餘儀なくした」(I, 23, 6) ところに戦争の眞の原因を求めた。此の兩勢力の衝突としてペロポネソス戦役を把握してゐるのである。

【註】「アガメムノンは當時最強の海軍國であつたからトロイア遠征軍を起すことが出来たのであり、諸國が彼に従つたのも誓に對する好意からではなく、恐れから従つたのである」(I, 9, 3)。「此の遠征によつて昔の戦争の性格を推察しうる」(I, 9, 5)と道破してゐるのも参照される。

かくの如く戦争を権力意志から考へるところに、例へば敗戦を神の懲罰とみるやうな超越的な性格が放擲され、あくまで人間の行爲として歴史を眺める立場が確立されたのである。

このやうに人間的な立場をとつたことは、やがて恐怖とか利害とか嫉妬とかいふ人間心理への掘り下げともなり、或はまた「戦は金錢と思慮とによつて勝敗が決する」(Think, II, 13, 1)とするやうに、人間生活の物心兩面から歴史を考へるやうになつたのである。人間の思慮を歴史の一つの重心としたことが、もし當時のギリシア人の知性的な一端を示すとすれば、金錢についての發言は、

彼等の生活の上に占めた經濟の意義を考慮してゐるといひうる。ツクユデイデスは戦争について經濟の重視すべきを説いたことは、歴史における經濟生活の意義を知つたといふ點で人々の注目を惹くのである。實際彼の生活記事は、單に綺談的な話、珍奇を求める好事家に話題を提供する程度を遙かに超えた、切實な生活描寫である。

まさしく人間生活の眞實を語らんとする意欲に根源をもつてゐる。「人間の業績はその成果について論ずべきではなく如何に知力、精力を注いだかについて論ずべし」といつてゐるのも、單に褒貶を事とするのでなくて實相について深き洞察を捧げんとした結果である。

またツクユデイデスは人間の歴史のうち、理性リジューによつて知りうる合理的なるものと、運命フュクに歸すべき非合理的な部分の存することを知つてゐた。ペリクレスの演説に (I, 140)

「事件の動きは人間の思慮とは異つて氣紛れな不可解なものだ。吾々の計算を超越する運命に歸せなければな

らぬ所以がある」

といつてゐるのは、歴史の非合理的な面を示したのである。しかも「人間は希望や期待エムズによらずして先づ考ふべきだ」(III, 45, 46)と説く所以は、人間が合理的に進退すべきを教へたのであつて、人間の行爲は飼くまでも合理的なものとしてあるべく、またそれによつて満足すべきことを教へてゐるのである。

人間の行爲を合理的に終始すべしと教へ、甘き希望に陶醉すべからずといふとき、行爲する人間としては徹頭徹尾現實にたじろかす現實を直視するところがなければならぬ。此の人間行爲のフアクタとなるものこそ、同時に人間の歴史のフアクタでなければならぬ。古來、彼は強き個性をもつものと考へられてゐるが、その基くところは、事實への探求、客觀性の尊重にあつたのである。

然らば歴史は事象の無意味な連結と考へられたか。

敘事詩には統一があるが歴史にはそれが無いといつた
アリストテレスの言葉は、キケロにもプルタルクホスに

も傳はつてゐる。おしなべていつて之が古典世界における歴史理解の一般であつた。畢竟それは事象的認識が即ち歴史だと考へるからである。そして歴史は連続して切断面をもたぬと考へるからであり、歴史事件を貫いて流れるものゝ存することを思はなかつたからである。たとひ歴史は神の意圖によつて支配されてそこに統一を見出さうとしても、神は氣紛れであつて屢々統一を紊るやうにも受けとられることがある。少くとも人間凡慮の窺ふことの許されぬものと觀ぜられたかに思はれる。こゝにツクユデイズが、歴史のうちに非合理的なものを認容しながらも、合理的に形成さるゝもの、また合理的に形成すべきもの、としたことは、歴史を純粹に人間のものとしてしかも合理的に理解すべしとしたことである。かく人間の歴史を合理的なりとしたが故に、諸々の歴史事件が理性によつて統一を見出しうるとされたのである。

吾々はギリシア人が歴史の統一、就中世界史についてどう考へたかを次に考察しよう。

六

ギリシアの歴史學は地誌と結合して展開した。そこで歴史の視野の擴大は、先づ地理的空間的な世界の擴大として把握した。やがて民族的自覺が強まるとともに、自己中心の世界として世界を考へ、さういふ立場から歴史記述も統一的世界の把握に導いたのであつた。

元來ロゴス作家のものした地方誌は、地理的地域的な結合を考へたものである。世界圖とか世界巡遊記と稱するものがあらはれても、比較的詳細に知られてゐる自己の周邊から、比較的曖昧な邊境へ向つて、知見がひろまりゆくといふにとゞまつた。中心となる一國を考へたり、或は對立的な地方を確認するといふのではなく、甚だ臚氣な自己中心的世界認識であつた。

ギリシア人がギリシア誌を書き出したことが、漸くヘラスを中心とし、他を周邊と考へてきたものといひうる。ギリシア人にほんたうに自分が世界の中心だといふ自信をもたせたのはペルシア戰役であつた。ヘロドトスが此の時はじめて世界的把握を實現したのであつた。即ち次にとくやうに彼は歴史的意識によつて、はじめて眞の

世界といふ概念を構成した。單なる地域的な世界ではなく歴史的な世界を認識するにいたつたのである。

ギリシア人が自己の營むギリシア世界といふものについて、從來は、唯バルバロイを想定してゐたが、それは單にヘレネス世界の周邊とみてゐたにすぎない。ヘロドトスは、ヘレネス世界に對立するものとして、東西二つの世界、ヘレネスとバルバロイの世界を考へたのである。その二つの世界の交渉のあり方として神話以來の關聯を考へ、その交渉の最後の段階としてペルシア戰役を取り上げたのであり、この二つの世界の對立交渉のうちに世界史的統一を見出したのである。

世界史的統一を考へることは、そこに作者の世界觀、世界史觀がなければならぬ。それこそ歴史における統一要求のあらはれである。勿論ヘロドトス自身思索の結果として世界史がつくられたのではなく、現實の事態がかゝる統一的把握に導いたといはるべきであらう。しかし半面には統一についての十分なる意圖なくしては達成しえない事である。

ツクニデイデスは一見すれば單にヘレネス世界に起つた戰爭を取上げたのであつて、ヘロドトスの如き世界史とはちがふのである。けれども戰役の個々の事件を記述した背後には、アテナイの没落を體驗した彼がアテナイの盛衰興亡を一聯の歴史として統括した把握がある。ペロポネソス戰役の記述はそれを根幹とし、すべてはその角度から、その線に沿ふて、個々の事件が考へられてゐる。だから題材の上から世界史ではなくて國史なのであるが、内容の上からは世界史的統一をもつてゐると考へらるべきである。即ちギリシア史學はかくてツクニデイデスによつて遅しき發展を遂げたと稱さるべきである。

ポルユビオスは(1, 3, 3等)、

「第一四四オルムンピアス(二二〇—二二七年)以來、歴史は一體として關聯する。イタリア、リブユアの事件がアジア、ギリシアの事件と結びつき、一つの目的に向つて進行する」

といつてゐる。

彼は明確な世界史的統一の存することを確認してゐる。けれども實は世界の時空的關聯の事實に出發點をもつて居り、ロオマの世界統一といふ事實に照應せしめたものである。彼の世界史把握の仕方はヘロドトスと同様世界の現實に刺戟された、いはゞ受身の態度である。そして内容的關聯よりも、むしろ同時的發生といふことに重心が傾いてゐるやうである。これはやがて、同時的發生といふ關聯から、地域的世界の記述をすることを以て、世界史でありとするやうなデイオドロスの世界史の發生をさへ來すのである。かくては昔のロゴスの作家の世界誌と大差なき世界把握と墮するのであつて、歴史的统一といふことの反省は稀薄となりゆくのである。かういふ見地からすると、ポルユビオスの歴史記述は、世界史的述作によつてきこえてゐるにも關らず、反つてツクニデイデスに及ばないといふべきである。

かういふツクニデイデスの偉大さは、ポルユビオスには十分理解されてゐなかつたやうであつて、やはり地域

的世界の全體にわたつて記述するといふことに、より多く關心をひかれたものゝ如くである。

ポルユビオスはエプホロスを賞揚して、

「眞に統一史を書かんと試みた最初にして唯一の人である」(V, 32, 2)

といつてゐる。同じやうに世界史を理解したと思はれるダイオドロスも、

「エプホロスは共通の事件を書くに、單に表現レクシスによるのみならず、秩序だててやり上げた」(Diodoros, V, 1, 4)といつてゐる。エプホロスこそ古代の歴史家が目して世界史の鼻祖の如くにみた人物である。それが誤りであることは上述するところによつて明かである。

のみならず、エプホロスの所謂世界史なるものは、恐らくアレクサンドロス大王の死後に書きあげたものであらう。(cf. E. Meyer, Forschungen zur alten Geschichte, I, S. 215, A. 25; Jacoby, Fragmente, II, C, S. 25) 即ちアレクサンドロスの覇權的業績に刺戟されて書き、彼の統一した世界の歴史を書くことによつて、統一をもつ

世界史を構成したといふべきであらう。ヘロドトスと同様に、統一を保つたといふ現實によつて歴史の外形が世界的、統一となつたと解したやうに推定しうる。ポルユビオスの世界史も亦同様である。ロオマの世界統一といふことによつて内容が統一されたのである。だから古代の世界史は概ね、否、殆んどすべてが、消極的受動的であつたといへよう。或はかゝる現實が要請となつて常にかゝる世界史觀をつくりあげたといつた方が正しいかもしれなう。

七

眞に世界史的立場を領解したものとしてはツクユディウスを推すべきであるが、彼こそギリシア史學の大成者であるといつて好い。少くとも歴史に對する數多くの問題を出し、之を解決したのは彼である。それが古代において十分理解されず、ギリシア史學は次第に衰退していつた。それはどうしたわけであらうか。自分はその一つをギリシアの政治的没落にあるといひたい。現實の世態の萎微したことは、之を貫く歴史精神の把握を不可能に

した。少くとも政治史はツクユデイデス以後に没落してしまつた。

偶々あらはれたものは、イソクラテスの弟子でエプホロスと同門であるテオポムポスのプヒリッピカのやうに、局部的な、地方史的な性格をもつたものであつた。また數多くあらはれたアッテイスの如きも地方史の一例とみるべく、それらはたかたかアテナイの文化を誇らんとするにとゞまつた。

歴史はかゝる地方史でなければ、辯士たちの書いた警世の書であつた。既にといたやうに、それらは事實の探求よりもむしろ過去の禮讚を意圖したものであつて、嚴密に歴史とは稱し難い。これは實踐の地盤として實用を歴史に求めた結果である。すべてを自己の立場において眺め批判するに急であつて、それらの事件を産み出した環境において事件をみることをしなかつた。而して歴史をみるといふことは言ひ易くして實行は甚しく困難なのである。批判が片寄るといふことは歴史家がそれ／＼の世界觀に立つ以上免れ難き困難であつて、ツクユデイ

デスの如きすら、怠らぬ注意を以てしてなほ十分に達成しえなかつたところである。

歴史の實用を主とするとき、現代的立場が主潮をなすのであり、ツクユデイデスにおいても古代を語ることは極めて簡單であり、テオポムポスはツクユデイデスの立場をとつたものといはれてゐる。しかし眞の實踐の教訓として未來を指すものは、實は現實が過去の地盤に立つことを深く反省し、従つて過去を眞のあり方において把握することが、先づ考へられなければならない。歴史を實用の學としてみたギリシア人の功を思ふとともに、一方歴史を歴史において把握するといふ點に未だしきものあるを切に感ずる。ギリシア人は現實が歴史的地盤の上に立てりとする自覺に乏しかつた。ツクユデイデスすら人事の類比のうちに教訓をえんとしたにすぎず、歴史を動くものとして眺めえなかつた。

ギリシアにおいて歴史學の衰退した他の一つの理由は、學問の方向が自然科学的、數學的となり、また人文科學においても論理學心理學など抽象的學問が盛となつ

たことである。偶々國家を考へ社會を考へるにしても、その歴史的現實についてとなく、政治の理論を考へたのであり、人倫の理論を究めんとした。かくて歴史事實への反省が衰へていつた。

アリストテレスは史學を重んじて居り、史料を探求し、歴史的作品をも残してゐる。けれども歴史家といふのでなく、彼の理論の實證を歴史に仰いだといふべきである。従つて彼によつて歴史學は別に發達をみたのではない。彼の末流の逍遙學派にいたつては、師風的一端を繼いで、古代の歴史などを材料として蒐集するに努めるものが出現したにすぎない。眞に學問的な歴史述作をとむるにはいたらなかつた。

けれども歴史を理論のうらづけとしようとしたために、何等かの理論を歴史のうちに見出さんとし、之によつて、歴史のうちに統一を考へんとしたことは、歴史學の上に功獻するところがあつた。アリストテレスは敘事詩は歴史よりも統一があり、より哲學的であるといつてゐるが、彼が統一に乏しい歴史に統一を考へんとしたことは、歴史をより哲學的ならしめんと企てた結果にとな

つた。例へば政體の輪廻の如きは、ポルニビオスに繼承されてゆくのであつた。歴史を單に事件の敘述にとどまるとか、勸善懲惡の具とするといふにとどまらないで、それらの事件を貫いて流れるものに留意せしむるにいたつたのである。

結

ギリシア人の生活力の最も旺盛であつた時に、政治と生活とが不可分に結びつき、此の政治生活に歴史が堅く結合した時代に、ギリシアの歴史學は最も花々しき成果をあげ、國民の要望に答へたのであつた。

ギリシア人の政治的活力の衰へると共に政治と生活とは遊離し、ギリシア人の生活はその私的生活がむしろ主體となつていつた。この時代には、人倫としての學問が榮え、實踐よりもむしろ理論に傾き、哲學が空前の成果をあげた。此の時代には歴史はたかか讚頌の教訓として取り上げられ、教訓と稱して自己の主張を歴史に籍りんとした。そのために歴史事實は誇張され歪曲され、恣に解釋しても敢えて歴史を冒瀆するとは思惟せざるにいたつた。こゝに歴史學の衰退があつた。

現代において歴史反省の聲が昂まりつゝあるは、之をギリシア史學の展開と對比して考へるとき、或は政治生活への關心の高揚と目さるべきであらう。但し歴史事象への慎重なる反省なくして、褒貶のことに急なることあらんか、ギリシアの辯士の史論の如く、反つて歴史學を衰退せしむるであらう。のみならずひとり歴史學を衰へしむるばかりでなく、堅實なる歴史の省察を缺くの結果、世道を非歴史的なる誤謬の深淵に陥らしむる危険を藏する。

後記

すべての出版物が制限を除かれたとしても、それは法規的であつて、紙不足といふ實際問題からは嚴重な制約を免れない現状である。そこを慮つて挿入すべき引用句も、可及的省略に従つて意のつくさざるを懼れてゐた。ところが割當より四頁少なかつたといふので、反つて編纂者に迷惑をかけた模様である。のみならず、此の頁において一段と七行餘白が出来たが、空白にするのは勿體ないといふので、更に餘白録を書けと要求された。編纂者はこれほど苦心するものであることを、讀者は深く銘記し感謝してよからう。

ところで聊か補つておきたい一つは、四節にのべた歴史と實踐との關係である。古代人及び一般人は歴史と實踐といへば、政治への理解、政治教育といふ角度からとりあげる。しかし實は吾々の考へ方について歴史に學ぶべきである。現實が歴史的基础に立つといふとの理解が、歴史によつて與へられなければならないのである。このことについては、ツクヌデイデスと雖も十分に考へてゐな

ギリシアに於ける歴史學の展開

い。たかだか人間性の類似といふことであり、結局、歴史はくりかへすといふ主張と大差がない。ギリシア史學にとつては、これはいはゞ未開拓の領域であつた。

今一つギリシア歴史學の缺陷は、例へば六頁にのべたやうに、如何なる「制度の下に」民族が興亡するかといふ風に歴史をみることである。つまり外からの制約だけを注目して、如何にしてそのやうな制度が出来たかと考へないことである。勿論制度の來歴は説かないでもない。僭主政治をたほして民主政治が出来たといふやうに。しかし歴史の追求するものは、たゞ來歴において、事件の結果としてみることに満足すべきではない。

畢竟、歴史を外から眺めてゐたためである。生活の實相から、即ち、歴史を内からの必然として考へようとしてみなかつた。これは現代でも往々見うける研究態度であるが、ギリシア史學もかかる缺陷をもつてゐた。

しかしかゝる缺陷をもつたにも關らず、これらの歴史はいづれも當時の人の要望に答へてゐたのである。ツクヌデイデスのやうな不世出の天才を以てしても、それ以上掘り下げてゆかなかつた。これはアリストテレスの詩學やアルタルクホスにみえるやうに、歴史を敘述的なものとみ、歴史事象を無際限に連續するものとみて、満足してゐたからである。(この點ポルキエオスが、カタストロフを考へたことは注目されてよい。)同時に、ギリシヤ人一般の生活が、與へられたものであり、創り出すきひなかつたことに由來する。善且つ美なる行爲が説かれても、その教説は依然として外から與へられるものであり、市民自らの生活から産み出さるべき、善且つ美でなかつたことも參酌すべきである。畢竟、古代生活のつくり出した歴史であつた。

このことは世界史についてもいひうる。しかし眞の世界史は現代においてはじめてみられるといふやうな言説は、恰かも、現代は現代において眞の現代であるといふに等しい。それよりもオイクメネの世界を「整備」し調節し人間の世の「裝飾」とみるコスモスの世界にまで、考を導いたギリシヤ人に敬意を捧げよう。

第三十卷 第三號

一七